

当事者活動にみる多様性と創造性

—メンタルヘルスに関連したパフォーマンス活動からの検討—

杉本 洋*

*新潟医療福祉大学

Diversity and Creativity in Activities Done by People Having Illness: From the Performance Activities Related to Mental Health

Hiroshi Sugimoto *

* Niigata University of Health and Welfare

〈要旨〉

本研究は、当事者活動における多様性と創造性とは何かという問題意識のとなされたものである。具体的には、当事者活動においていかなる多様性がみられ、多様性がある活動が関係する中で、いかなるものが生み出されているのかを、メンタルヘルス関連のパフォーマンス活動から例示し、当事者活動の多様性や創造性をみつめる視点を検討した。複数の活動への参与観察からは、関係者を含む活動を構成する人々の属性、体験等が多様であることに加え、活動自体に関する事、たとえば組織運営のあり方や、表現方針などの違いがみられた。そして、構成する人々が多様であるからこそ、新たなパフォーマンスや関係性の構築の可能性が開かれること、活動に多様性があるからこそ、活動のあり方や理念、といったものが活動間の関係の中で生み出され、洗練されていくことが示された。当事者活動の多様性と創造性については、今後当事者活動における多様性のみならず、当事者活動によって開かれるコミュニティにおける多様性を検討すること、創造性については、当事者活動におけるエトスとして、またパフォーマンス活動にみる表現がコミュニティに形作る文化が生成されるプロセスとして検討することが求められる。

キーワード

当事者活動	activities done by people having illness
多様性	diversity
創造性	creativity
パフォーマンス	performance

I. 序論

本研究は、当事者活動における多様性と創造性を考察するものである。ここでは多様性とは、グループのメンバーや関係者、活動自体の多様性を指しており、創造性とは、活動を通して生み出されるものおよび創造がなされる過程や性質を指している。共通性の意義が強調されがちな当事者活動における多様性への向き合い方、そして画一的に症状を消す立

場のみで解決・解消されない問題への対応を考える上で多様性や創造性の理解を深めることが求められる。

メンタルヘルス関連の当事者活動といえば、セルフヘルプ・グループなどが知られている。そこでは当事者同士ならではの共感や体験的知識を得ることができる¹⁾。セルフヘルプ・グループは同じような経験をした人々のグループであり、メンバーの共通

性に着眼されやすい。そうした中セルフヘルプ・グループのメンバーの見解の違いや、差異がある中での特同性のありようの考察がなされている²⁻³⁾。また、セルフヘルプ・グループには、メンバーの抱える問題や目標によって、自らを変えようとするものや社会を改善することを目指すものなどいくつかのタイプがあることがいわれている⁴⁾。そして、創造性については、セルフヘルプ・グループは関係性の中で新たな生き方や、回復の文化を創造するということが指摘されている⁵⁾。

筆者は当事者活動の中でも、心の病やひきこもりなどの経験を持つ人々による表現活動についての調査を行ってきた。そして、個々の活動を追いながら、活動する人々の実践やそこに潜む知の検討を行ってきた⁶⁻⁷⁾。複数の活動間の関連については、その歴史的な概略を示し、ある活動が基点となり様々な活動が展開されることなどを一部示してきた⁸⁾、複数の活動において何が異なるのか、そこで何が生み出されるのかといった点に着眼した研究を展開していくことが課題となっていた。

当事者活動といえばセルフヘルプ・グループや障害者運動などの研究が多くみられるが、本研究ではそれらとは重なりながらも異なる当事者活動のありよう、また特定の単一のグループを超えた活動および人々に着眼をしてみたい。当事者活動における多様性と創造性の理解を深めるために、パフォーマンスという創造的側面が強調される要素を持つ活動をもとに、いかなる違い（特に特定のグループ内部の話を超えて）があり、そこからいかにしていかなるものが生み出されるか、といった視点から活動を描くことが求められる¹⁾。それらを検討することにより、新たな当事者活動の側面、特にひとつのグループの視点を越えたコミュニティにおける当事者活動の理解の進展が期待できる。

II. フィールドワークの概要

本研究は、2008年より継続的に行われている活動への参与観察、活動に関連する関係者の著書等のドキュメントの収集、関係者へのインタビューなどのフィールドワークによる成果となる。フィールドワークは、時に観客として、またはスタッフとして

活動に関与することによって行われた。活動はライブ活動のようなものから、講演会、グループやパフォーマー個人が依頼を受けて行うものなど多岐にわたった。収集された情報は問題意識に基づき、活動にはどのような違いがみられ、何が生み出されるのか、という観点からその内容を例示・整理した。例示・整理された違いや生み出されるものをもとに、それらと関連する当事者活動における多様性や創造性に関連する知見を踏まえ、分析を深めた。そして、今後当事者活動における多様性と創造性を見据えていくうえで求められる視点を描出した。

倫理的配慮にあたっては、フィールド関係者との関係性のもと適宜、提示する情報を選別するなどの配慮を行った。そして、適宜研究成果を関係者にフィードバックしつつ研究を継続している。なお、研究者所属機関（新潟医療福祉大学）の倫理審査の承認（承認番号18071-180918）を経て調査を行っているⁱⁱ⁾。

III. 表現活動の概要

最初に本研究のフィールドとなるいくつかの表現活動の概要について述べる。ここで取り上げる活動は、K-BOX、こわれ者の祭典、カウンター達の朗読会、生き様発表会、という活動となっている。

1. K-BOX

K-BOXは、心の病やひきこもりなどの経験を有する人々による芸能プロダクションという位置づけで活動が行われている。メンバーは約20名ほどで、パフォーマーの他に、レッスン生、スタッフといった形でK-BOXにかかわる人もいる。代表のKaccoさんが活動を開始し、歌やパフォーマンス、小物制作、イラスト制作などの活動を行っている。主に新潟でのライブ活動を中心としながら、地域の各種イベントにおいて、所属するパフォーマーが活動を行っている。

2. こわれ者の祭典

こわれ者の祭典は、詩の朗読などを中心としたパフォーマンスを行う活動で、現在メンバーは代表の月乃さん、Kaccoさん（先に挙げたK-BOXの代表でもある）となっている。新潟、東京でそれぞれ年2回程度のイベント「こわれ者の祭典」を行っている

た。東京では様々なサブカルトークイベントを行ってきた会場でイベントを継続して行く、著名人のゲストを招いたトークがなされるなどの特徴がある。依存症や摂食障害、いじめ、ひきこもりなどの経験をイベントで語り、孤立、生きづらさに悩まされる人へのメッセージは作品（自作詩）としても伝えられる。新潟ではお笑い集団代表が司会をするなど、深刻な話にユーモアを織り交ぜる進行がなされる。2002年にこわれ者の祭典が行われて以来長期にわたって活動が行われている。

3. カウンター達の朗読会など

こわれ者の祭典でも過去に活動していたアイコさんらによる活動として行われている。出演者は4～5名程度でそれぞれ、歌やライブペインティング、詩の朗読といったパフォーマンスがなされる（写真1）。



写真1 カウンター達の朗読会
(2018年1月27日)

カウンター達の朗読会は東京で不定期に行われており、2018年には12回目を迎えている。近年は共演者も異なる形で「ハロー言葉」というイベントが行われており、2020年3月に3回目が行われた。表現活動は組織的な生きづらさ活動であると共に、活動の人脈やパフォーマンスの幅の広がりが見られること、パフォーマーとしての個々人が活発に行なっているものであることの印象を抱かせる活動であった。

4. 生き様発表会

生き様発表会は、もともとはこわれ者の祭典の初期の頃にイベント出演者募集のオーディションが行われ、その出演者により始められたイベントとなっている。現在は統合失調症の当事者でもあるYoppyさんを代表として活動がなされている。年

に数回のイベントを新潟で実施し、パフォーマンス内容は当事者による歌が中心となっている。Yoppyさんは、ギタリストとしてこわれ者の祭典に参加していたこともあり、時にイベントの司会を務める周佐さんは過去にこわれ者の祭典のメンバーとして活動していたこともあるなど、こわれ者の祭典の活動に関わってきた関係者もいる。出演者が病気の経験をステージで語る座談会が行われるのが恒例となっている。

IV. 活動にみる多様性

活動にみる多様性はひとつの活動の内部にもみられれば、活動間による違いもみられる。ここでは、それらについて例示する。

1. 活動するメンバー・関係者の違い

メンタルヘルスに関連の深い活動におけるメンバー・関係者という点で、病気を抱えていたり共通点は多い。しかし、同じ活動であってもその内部のメンバーは個々の活動間で異なってくる。性別や年齢、抱える疾患や経験も共通した点があれば、異なる点もある。活動によっては、身体障害を有する人や健常者といわれる人がステージに立つこともある。たとえ同じ障害であっても語られる経験は異なる。こうした人々が共にいることによって、イベントに面白みが出てくる。

たとえば、KBOXでバラエティアイドルという立場で活動する姉さん&ゆるキャラシスターズ（略して「姉ゆる」）というユニットでは（写真2）、長年スタッフとして活動してきた「姉さん」が健常者の立場として、ちゅうさんが子が発達障害という当事者家族の立場として混在するユニットとなっているⁱⁱⁱ⁾。

活動への関わり方も多様で、たとえばK-BOXにおいては同じK-BOXのメンバーという立場であっても、スタッフとして関わる人、パフォーマーとして関わる人、双方の役割を担う人もいる。他の活動においてもメンバーというわけではなくとも、観客としてはもちろん、ボランティアスタッフとして活動に関わる人もいれば、司会者やゲストとしての関わりもみられる。活動によっては、継続して活動に関わっている司会者には、フリーアナウンサー、お



写真2 姉ゆるのパフォーマンスとパフォーマンス会場で製作小物の物販
(2020年2月11日)

笑い芸人，映画監督といったキャリアを有する人たちがいる。

このように，当事者であるパフォーマーや関係者も様々であり，イベントはそうした人々によって構成されている。イベントを通じた関係は，既存の当事者活動で語られがちであったメンバーの多様性や当事者-専門家という観点とはまた異なった他者との関係が創られていくことが見いだせる可能性がある。

2. 活動自体の違い

同じメンタルヘルスが関連する表現活動であっても，活動ごとの違いがみられ，それらについて例示する。

まず，特徴的な違いに，組織的なありようがある。たとえば，芸能プロダクション，または居場所的な意味合いが強調される K-BOX は，所属する人数が約 20 名程度と他の活動に比して多い。定期的集まり，代表の Kacco さんのリーダーシップが発揮される。活動の場は定例ライブと共に，地域のイベント等多岐にわたり，それらの営業は Kacco さんによるところが大きい。メンバーにはパフォーマーと共に，スタッフとして活動する人，見学者やレッスン生という立場の人もある。次に示される様に，ライブの終わりに観客を交えて歌われる「K-BOX 大家族の歌」という歌があり，それにも表されているようにメンバーと観客・関係者を含めた「大家族」的な関係を作っている^{iv)}。

夢を持てなかった日々を抜け語り合える仲間もできた

みんな大切な家族だよ 絆の強い家族だよ
どんな逆境だってみんなで助け合い越えるんだ
カッコつけなくてもいいありのままの僕でいい
同じ思いをわかちあえる家族
生きづらさから繋がったみんなの声が響きます
ように (K-BOX 大家族の歌 2018 年 12 月 16
日ライブ時配布物より)

一方，こわれ者の祭典や，カウンター達の朗読会には，パフォーマーがある程度固定されており（3～5 人程度），メンバーは限定的な状況にある。しかしながら，こわれ者の祭典では，月乃さんによる広く生きづらさで苦しんでいる人とのつながりを示す「仲間」という言葉を用いた自作詩の朗読パフォーマンス，カウンター達の朗読会による事前に募ったメッセージを読み上げる取り組み，ハロー言葉によるオープンマイクという参加者（観客）にパフォーマンスをしてもらう取り組み，オンラインでのイベントの配信などがみられ，観客や会場に来られない生きづらさを抱える人々全体とのつながりが意識されている側面がある。実際にオンラインでの配信では多数のアクセス（2 万アクセスを超えることもある⁹⁾）がみられ，様々なコメントが寄せられる。これらの取り組みは，つながりを重視するという点で深く共通していることがうかがえるが，同時につな

がりのありようの多様さを示している。

組織的な違いを含むつながりのありようと共に、活動の気風やそれが表されるパフォーマンスの内容も変わってくる。こわれ者の祭典やカウンター達の朗読会はサブカルチャー色の強い会場である新宿ロフトプラスワンや各ライブハウス等でイベントを行い、それがイベントを特徴づけている。K-BOX や生き様発表会は福祉会館などでイベントを行う機会が多く、比較的福祉色が強調される場合が多い印象を受ける。

パフォーマンスの種類には自作詩朗読などがあるが、K-BOX は、アート部門、ミュージック部門といったいくつかの分野で構成されていることもあり、パフォーマンスや表現も、歌、小物づくり、イラストなど多岐に渡ってくる。また、発するメッセージは、自らの体験など、どの活動にも共通するテーマはあるものの、方針の違いもみられる。たとえばK-BOX は、「変えられるんだという希望を見せていきたい(2017年4月9日)」とのKaccoさんの思いの表れから、「こんなことができる」ということを伝える方針がみられる。一方で、こわれ者の祭典では、一般的には負の側面とみなされやすい要素が強調される側面がある。それはたとえば「元廃人サバイバーマン」¹⁰⁾「変質者としての私」という自作詩タイトルにみられる言葉、詩の朗読パフォーマンスにも現れ、パフォーマンスに面白みが加わると共に余計なプライドを消すことにつながっている。こうしたスタイルは以下のような考え方に基づくことが考えられる。

スキーで転ぶことは生きることで、「恥をかくこと、傷つくこと」だと思う。それは苦しいことかもしれないが、何回か経験すれば慣れてしまい、余計なプライドも消えて(かつての僕はなぜか異常にプライドが高かった)、生きられるようになっていく。⁹⁾

組織・運営的側面の違いや、各活動やそこに属する個人の考えのもと、パフォーマンス内容や表現方針などが活動ごとに異なってくる。

V. 多様性から創造されるもの

次に、活動にみる多様性から創造されるものについて例示したい。

1. メンバーや関係者の多様性から

まず、活動のメンバーの多様性から生じるものとして、イベントそれ自体が挙げられる。個性が重視されるパフォーマンスという分野において、メンバーの属性や経験が異なることは重要である。

生き様発表会で行われる登壇者がお互いの経験を話す座談会や、他の表現活動で多くみられるお互いの体験が語られる場合は、それぞれの属性や体験が異なるからこそ魅力的なものとなる。そうした場では時に健常者としての立場からかわる司会者から疑問が発せられたり、それについて答えたりと、お互いに関心をもって聞かれ、体験や感情が共有される。トークセッションや座談会での話が、違いや関心をもとに展開され、様々な体験を有する観客も共感したり、学んだりすることができる。

そして、メンバーや関係者・関係機関が多様であることで、多様な人々でユニットを組むことが可能となり、活動の幅が広がる。たとえば健常者や当事者が混在する環境があるため、「姉ゆる」のような新たなユニットが生じることもある。姉ゆるはK-BOXの定例ライブのみならず、様々な地域の祭りやイベント等でパフォーマンスを行うようになり、活躍の幅を広げている。こわれ者の祭典は、開始時より新潟のお笑い集団NAMARAと共にイベントを作り上げてきた経緯がある。司会者などの関係者が多岐にわたることで、パフォーマンスや福祉関係など様々な分野にわたって活動の広がりが生じてくる。関係性は絡み合っており、当事者、当事者活動を含むコミュニティ形成がなされることがみてとれる。

人々は固有であるから活動を構成する人々が多様であることはある意味自明のことではある。しかしメンバーや関係者の違いによってパフォーマンスの形態や場・文脈が広がり、活動をめぐるコミュニティが創られていることがみてとれる。

2. 活動自体にみる多様性から

組織的なあり方や表現方針などの活動の特徴からは、活動が多様であるからこそ創り上げられていくことがみてとれる。

生き様発表会の代表をしている Yoppy さんは、現在に至るまで、こわれ者の祭典や K-BOX で活動している月乃さんや Kacco さんと活動を共にしてきた経緯もあり^{v)}、「月乃さんや Kacco さんから影響を受けた」と述べていた (2019 年 10 月 29 日)。Yoppy さんは、生き様発表会の代表であるが、自らを「頼りない代表」という (2017 年 7 月 23 日)。しかしそのおかげで「みんながやってくれる」というように、団結心のようなものができてくるというあり方が生じてきている、とのことが同時にイベントで語られていた。リーダーシップのあり方も、活動それぞれで強いものからそうではないものまで異なってくる¹¹⁾。活動に様々な違いがあるからこそ、オルタナティブなあり方が生じる可能性が考えられる。たとえば Yoppy さんのリーダーシップのあり方にみられる活動の特徴は、代表の Yoppy さんが様々な活動に関係してきた経緯が影響していることが想定される。また、Kacco さんは、Kacco さん自身がこわれ者の祭典と K-BOX 双方の活動に携わっていることもあり、「(両者は似たようなものと思われがちであるが K-BOX の) 一体感とか、魂だけでやっているところとか」が異なる、といったことを述べていた (2013 年 8 月 18 日)。先に挙げた活動におけるサブカルチャー的要素、「プライドを捨てる」「『こんなことができる』ことを示す」という考え方などと共に、こうしたグループとしての活動や、個人の活動の基となる理念、つながりのありようなどが、活動が多様で比較・参照がなされることで、創造されていくことが想定される。

また、活動が多様であることから創られるものとして、オルタナティブな回復の場が挙げられる。たとえば、姉ゆるで活動している姉さんは、K-BOX で当事者の人々と長年かかわってきた経験から、「いろんな人を見てみると、お医者さんはお医者さんとしてちゃんと治してもらって、それとは別にいろんなところに足を運んであったところに。そしたらちょっとずつ皮を剥ぐようになっていく」と

語っていた (2017 年 7 月 13 日)。メンバーがそれぞれであるように、活動は多様であり、それぞれに「あう」ところ、そうではないところ、とあるのは想像できる。活動の多様性により、その人その人に合った回復のあり方を提供する場を生み出される。

本研究で焦点をあてた視点のひとつである活動自体の多様性およびそれらの相互作用から創造されるものは、それぞれの活動自体の特徴そのもの、およびオルタナティブな回復の場であることが考えられた。これらは、特定の集団の中で孤立を感じる人々の回復の場の創造といったコミュニティにおけるメンタルヘルスの構想につながる観点であるように思われる。

VI. 当事者活動における、多様性と創造性の展望

本研究では、メンタルヘルス関連の表現活動を例に、当事者活動においていかなる多様性がみられ、その中でいかなるものが生み出されているのかを例示し、それらから当事者活動の多様性や創造性を考察した。

そして、複数の活動への参与観察からは、当事者活動における多様性として活動を構成する人々との多様性に加えて活動それ自体の多様性が示された。次いで、構成する人々が多様であるからこそ、新たなパフォーマンスや関係性の構築の可能性が開かれること、活動に多様性があるからこそ、活動の特徴や回復のあり方や理念といったものが活動間の中で生み出され、洗練されていくことを示してきた。従来、グループを構成するメンバーの多様性についての言及はなされたことはあったものの、本研究ではそれらに加えて、活動の多様性、そこから生み出されるものといった観点からみえてくるもの一端が示された。

最後に本研究からみえてきた今後の当事者活動における、多様性と創造性についての研究の展望について示していきたい。まず、本稿では、活動にみる多様性およびそこから創造がなされるプロセスの一部を示したが、個々の特徴が創造されるプロセスは十分に示されていない。それぞれの活動の理念や個性等がいかにして創造されてきたのかの解明と検

討を深めていくことが求められる。

また、本研究では、活動にみる多様性として、メンバーや関係者の違いや活動自体の違いについて例示したが、それらの相互の関連の詳細、たとえば当事者グループに関連する組織・人々との関係を今後明らかにしていくことが求められる。本稿においても、イベントの司会者などの関係者について若干言及したが、当事者活動と当事者活動以外の人々や組織との関係についての理解を深める必要がある。それによって、相互作用の中での創造性のあり方、コミュニティにおけるセルフヘルプ・グループ¹²⁾の考察につながると考えられる。

そして、本研究では、組織の形態や表現の方針等にかかわる個人や組織の持つ理念の違い、その多様性から生じる創造性について触れてきたが、それ自体の検討を深めることが求められる。たとえば活動の理念といったところでは、「言説や感情の集合、すなわち行動の底に横たわるテーマ¹³⁾」^{p.5 (筆者訳)}となるセルフヘルプグループ・エトスについての言及がなされている。当事者コミュニティであるべてるの家の、「弱さを絆に」「三度の飯よりミーティング¹⁴⁾」、といった数々の言葉のような当事者活動におけるエトスを表現したものが知られている。当事者活動を越えた視点であるメンタルヘルスに関する地域に根差す考えである「病は市(いち)に出せ¹⁵⁾」といった言葉も同様なものととらえられる。本稿では、表現活動というフィールドから当事者活動の考察を行い、その中でサブカルチャー的要素が活動に取り込まれたり、「プライドを捨てる」といった考え方が例示された。これらは表現活動に表れるものであるが、他にはどのようなエトスが生み出されているのか、既存の当事者活動が編み出してきた考え方や何が同様で、何が異なるのかの分析を行うことで、当事者活動におけるエトスのようなものの創造についての理解が深められる。

セルフヘルプ・グループでは回復の文化や価値が創られるとされる⁵⁾。そして、パフォーマンスにより文化が流動的につくられることが知られている¹⁶⁾。パフォーマンスと病気をまたぐ活動は今まで検討される機会の少なかった分野であり、パフォーマンスに力点がおかれる活動という、活動の

多様性から新たな文化・エトスが生み出されていることも想定される。当事者によるパフォーマンスというものがいかにして他のアクターとつながりながら流動的に文化をつくるのかの解明が求められる。本研究で取り上げている表現活動ではパフォーマンス活動である点もあり、能動性が強調され、外に意識を向けながらパフォーマンスがなされる中、受け手との関係の中で、創造がなされるものと思われる。当事者活動において共通性は重要であるが、個々のやり方で能動性を発揮しつつ、つながりを回復していくこと、同時に当事者それぞれの多様性と創造性を引き出していくことが表現活動を通じた当事者活動の特色であり、そこにみる創造のプロセスに問題の解決とも解消とも異なるメンタルヘルスやヘルスプロモーションの新たな展望が見出せることが期待されるが、これらについては今後考察を深めていくことが求められる。

VII. 結論

本研究では、メンタルヘルスにかかわる当事者による表現活動から、活動に関係する人々や活動自体の多様性について示し、そこから新たな活動の形態や理念が形作られることを示してきた。今後は、当事者活動における多様性のみならず、当事者活動によって開かれるコミュニティにおける多様性を検討すること、創造性については、表現を通じた当事者活動におけるエトス、コミュニティにおける文化といったものの生成プロセスの検討が求められる。

補注

- i) 本稿においては、便宜上「多様性」と「創造性」という表記は概念として用いる際に利用し、事象として表す際は「違い」「生み出されるもの」等と区別して表すものとする。
- ii) 倫理的配慮について本文中に記したが、補足しておく。調査許可は、最初のフィールドワークとなるイベントに参加し、そこで口頭で話している内容や写真などを論文などの形で書くことの許可を活動の代表者に許可を得た。フィールドとなる表現活動はもともと人に見られる表現活動であること、メディアの取材を受ける機会

も度々あることもあってか、筆者の心配は裏切られる形で快諾してくれた。しかし個別には公表に対して抵抗が感じられる様子が見られた際は情報の利用を控えるなどの配慮を行った。しかしながら、調査はもともと暴力的なもの¹⁷⁾、匿名化や同意書は調査者側を守るものである可能性¹⁸⁾を考慮すると倫理は倫理的手続きでは済まされず、フィールドワーク・質的研究に際しては問いが調査の過程を経て洗練されるものであること、特定の人のみではなくその場における状況が調査フィールドとなることなどを考えると、厳密な説明と同意は困難なこともある。これらを踏まえ、調査者は調査に内在する非倫理性を自覚しながら状況に応じた最善策を随時探索することが求められるとの認識のもと調査を行っている。

- iii) 「姉ゆる」の活動の変遷や概要については杉本(2019)¹⁹⁾も参照のこと。
- iv) 組織形態としての「大家族」「仲間」の関係性の概要については杉本(2019)¹¹⁾も参照のこと。
- v) たとえば、Yoppyさんは、こわれ者の祭典が以前行ったことのあるオーディションに参加し、以降複数回にわたって、こわれ者の祭典でパフォーマンスをしてきた経緯がある。

引用文献

- 1) 三島一郎：セルフヘルプ・グループの機能と役割，セルフヘルプ・グループの理論と展開（久保紘章，石川至覚編），39-56，中央法規出版，東京，1998
- 2) 佐藤知久：セルフヘルプ・グループ—非同一的なコミュニティとしての，人類学で世界をみる—医療・生活・政治・経済（春日直樹編），21-38，ミネルヴァ書房，京都，2008
- 3) 菅森朝子：乳がん再発をめぐる同病者の「共同性」，保健医療社会学論集，29(2): 54-63，2019
- 4) Powell, T. J.: Self-help organization and professional practice, National Association of Social Workers Press, Silver Spring, 1987
- 5) 平野かよ子：セルフ・ヘルプグループによる回復—アルコール依存症を例として，川島書店，東京，1995
- 6) 杉本洋，伊藤泰信：「病気」の表現活動にみる生存者の肯定の技法，九州人類学会報，37: 51-68，2010
- 7) 杉本洋：表現を通じた「生きづらさ」の飼い慣らし—「弱さ」を分析視点として，アートミーツケア，8: 1-16，2017
- 8) 杉本洋：歴史の変遷からみる当事者活動間のダイナミズムの理解に向けての展望—病気や障害を有する人々による複数のパフォーマンス活動を通して，アートミーツケア，11: 107-115，2020
- 9) 月乃光司：人生は終わったと思っていた—アルコール依存症からの脱出，109，新潟日報事業社，新潟，2011
- 10) 月乃光司：元廃人サバイバーマン，こころの科学 メンタル系サバイバルシリーズ 私はこうしてサバイバルした（松本俊彦，斎藤環，井原裕監修），2-11，日本評論社，東京，2017
- 11) 杉本洋：関係性が切れることと築かれること—メンタルヘルスに関わる当事者活動における組織文化的課題への展望，仏教看護・ビハーラ，14: 99-116，2019
- 12) 大木秀一，谷本千恵：コミュニティにおけるセルフヘルプグループを基盤としたサポートネットワークシステム研究の今日的課題と展望，石川看護雑誌，7: 1-12，2010
- 13) Riessman, F., Carroll, D.: Redefining self-help: Policy and practice, Jossey-Bass, San Francisco, 1995
- 14) 浦河べてるの家：べてるの家の「非」援助論—そのままがいいと思えるための25章，講談社，東京，2013
- 15) 岡檀：生き心地の良い町—この自殺率の低さには理由がある，医学書院，東京，2002
- 16) 高橋雄一郎：身体化される知—パフォーマンス研究，せりか書房，東京，2005
- 17) 岸政彦，石岡丈昇，丸山里美：質的社会調査の方法—他者の合理性の理解社会学，有斐閣，東京，2016
- 18) 想田和弘：精神病とモザイクテープの世界にカメラを向ける，中央法規出版，東京，2009

- 19) 杉本洋：病気イベントにおける、「社会の縮図」の表現と「ゆるさ」によるつながり—当事者と非当事者の共同と接続の観点から，アートミーツケア，10: 172-180, 2019